

第 29 話：輸入サバ缶とサバ缶国内供給量の動向

日本水産缶詰輸出水産業組合・日本水産缶詰工業協同組合
専務理事 松浦 勉

「サバ缶詰を食べよう」シリーズでは、第 1 話が「テレビ番組によりサバ缶詰人気上昇」、第 2 話が「消費拡大に伴うサバ缶詰の新商品開発」、第 3 話が「中央水産研究所のサバ缶マニア」、第 4 話が「サバ缶詰を使ったご当地料理」、第 5 話が「レシピ本にみるサバ缶詰料理」、第 6 話が「サバ缶詰レシピ本の出版動向」、第 7 話が「レシピ本とテレビ番組がきっかけを作ったサバ缶ブーム」、第 8 話が「統計資料からサバ缶ブームをみる」、第 9 話が「サバ缶ブーム下における青魚 3 魚種缶詰の販売金額の動向」、第 10 話が「サバ缶の調理形態別消費動向」、第 11 話が「サバ缶ブーム期における輸入を含むサバ缶の供給動向」、第 12 話が「マグロ缶ブームとサバ缶ブームの比較」、第 13 話が「横浜市内小売のサバ水煮缶販売状況」、第 14 話が「ポルトガルの水産缶詰事情」、第 15 話が「鯖サミット 2019 in 八戸」、第 16 話が「水産高校とサバ缶詰」、第 17 話が「戦後の我が国における主要水産缶詰の生産量動向」、第 18 話が「戦後の我が国における主要水産缶詰の輸出動向」、第 19 話が「戦後の日本人における水産缶詰（ツナ缶）を通じた嗜好の変化」、第 20 話が「サバ缶の調理形態別国内消費量の動向」、第 21 話が「イワシ缶の調理形態別国内消費量の動向」、第 22 話が「サンマ缶の調理形態別国内消費量の動向」、第 23 話が「青魚缶詰における魚種間の連携」、第 24 話が「最近におけるサバ缶の販売動向」、第 25 話が「最近におけるイワシ缶の販売動向」、第 26 話が「最近におけるサンマ缶の販売動向」、第 27 話が「千葉県銚子市の水産缶詰の動向」、第 28 話が「主要道県における青魚缶詰の生産動向」についてお話をさせていただきました。第 29 話は、「輸入サバ缶とサバ缶国内供給量の動向」についてです。

サバ缶ブームによって、サバ缶を取り巻く環境が大きく変化しました。本稿では、缶詰時報、総務省家計調査月報、食品スーパーマーケットの POS データ、財務省貿易統計などから、輸入サバ缶とサバ缶国内供給量の動向についてお話をします。

表 1 に、「総務省家計調査月報における魚介缶詰の 1 世帯当たり支出金額の推移」を示しました。魚介缶詰の 1 世帯当たり支出金額をみると、2017 年 9 月から 2019 年 9 月までの支出金額は、前年同月比を上回り、この間における支出金額のピークは、2018 年 12 月の 353 円でした。そして、2019 年 10 月以降、支出金額が前年同月比を下回ったことから、サバ缶ブームは 2019 年 9 月までで終了したといえます。

しかし、2019 年 10 月から 2020 年 12 月までの支出金額は、引き続き 200 円以上を維持し、サバ缶ブーム前の 2016 年の各月を上回りました。なお、2020 年 3～6 月の支出金額は前年同月比を再び上回りましたが、これは新型コロナウイルス感染症予防対策による巣ごもり

需要発生の影響によるものと思われます。

魚介缶詰の1世帯当たり支出金額（年間合計）は、2016年が2,484円であり、その後も毎年増加して、2017年が2,593円、2018年が2,891円、2019年が3,014円、2020年が3,140円でした。このことから、サバ缶ブームをきっかけに、魚介缶詰の1世帯当たり支出金額の年間合計は、2017～2020年の4年連続で前年比を上回りました。

表1. 総務省家計調査月報における魚介缶詰の1世帯当たり支出金額の推移

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間合計
2016年	188	187	211	211	204	205	230	232	193	195	193	235	2,484
2017年	176	203	213	216	202	204	232	229	216	221	214	266	2,593
2018年	186	205	225	214	230	236	252	257	226	251	253	353	2,891
2019年	225	256	275	252	246	266	277	263	257	244	205	248	3,014
2020年	215	249	315	304	268	276	272	266	247	217	229	282	3,140
2017年/2016年の比率	94%	109%	101%	102%	99%	100%	101%	99%	112%	113%	111%	113%	104%
2018年/2016年の比率	99%	110%	107%	101%	113%	115%	110%	111%	117%	129%	131%	150%	116%
2019年/2016年の比率	120%	137%	130%	119%	121%	130%	120%	113%	133%	125%	106%	106%	121%
2020年/2016年の比率	114%	133%	149%	144%	131%	135%	118%	115%	128%	128%	128%	128%	128%

資料：日刊缶詰情報（東京食料新聞、2021年2月8日）

サバ缶の需要量は2017年秋以降増加したため、供給量を増やす必要がありました。しかし、国内の缶詰会社だけでは生産能力に限界があり、需要量に見合うだけのサバ缶を供給することができませんでした。このため、日本の輸入商社等がサバ缶を輸入するようになりました。

サバ缶の国内供給量は、サバ缶の輸入によってどのように推移したのでしょうか。「国内供給量」は、「国内生産量」と「輸入量」、「輸出量」から求めることができます。しかし、財務省貿易統計には、サバ缶単独の輸入数値がなく、サバ調整品として、サバ缶以外にサバみりん干しなどの加工品を含んだ輸入数値が計上されています。貿易統計からサバ缶だけの輸入量を把握することはできませんが、東南アジア各国から輸入されるサバ調整品に占めるサバ缶の比率は高いことが知られています。東南アジア各国は、日本から輸入する冷凍サバ類の多くを缶詰原料として利用しており、日本が東南アジアから輸入するサバ缶は、すべて日本産サバ使用と表示されています。実際、東南アジア各国におけるサバ調整品の輸入量は、2016年と2017年には相対的に少なく増減幅も小さかったが、サバ缶の輸入量が増加した2018年以降、大幅に増加しました。また、日本国内の小売店舗で販売される輸入サバ缶から、日本がサバ缶を輸入する相手国は、タイ、ベトナム、フィリピン、マレーシアの4か国が多いことがわかりました。

そこで表2に、「サバ缶国内供給量（推計）の推移」を示しました。「サバ缶国内供給量（推計）」は、「(サバ缶の国内生産量) + (東南アジア関係4か国からのサバ調整品輸入量)

ー（サバ缶の輸出量）」から求めました。なお、日本は中国と韓国からもサバ缶を輸入していますが、これら2か国は日本産サバを缶詰原料として使用していないことと、輸入量が少ないため、表2では、日本がサバ缶を輸入する相手国から除きました。また、同表には、家計調査年報における魚介缶詰1世帯当たりの支出金額（年間合計）も加えました。

同表によると、「サバ缶の国内生産量」と「サバ缶の輸出量」はあまり変化していません。しかし、「東南アジア関係4か国からのサバ調整品の輸入量」は、2016年と2017年の平均が9千トンでしたが、2018年が15千トン、2019年が33千トンに急増しました。その結果、「サバ缶の国内供給量（推計）」は、2016年と2017年の平均が44千トン、2018年が62千トン、2019年が76千トンとなりました。

2016年と2017年の平均国内供給量（推計）を100%とすると、2018年が141%、2019年が173%に増加しました。また、家計調査年報における魚介缶詰の1世帯当たり支出金額（年間合計）は、2016年と2017年の平均支出金額を100%とすると、2018年が114%、2019年が119%に増加しました。このことから、特に2019年には、支出金額の増加(119%)に比べて、国内供給量（推計）の増加（173%）があまりにも多く、サバ缶が過剰に輸入されて売れ残ったことが推測されます。

なお、東南アジア関係4か国のサバ調整品輸入量合計に占める国別比率をみると、タイは、2018年が62%、2019年が62%と高かったが、2020年には21%に低下しました。一方、ベトナムは、2018年が36%、2019年が29%と低かったが、2020年には67%に増加しました。

表2. サバ缶国内供給量（推計）の推移

	サバ缶の国内生産量 (A)(千トン)	東南アジア関係4か国からのサバ調整品の輸入量(B)(千トン)	サバ缶の輸出量(C)(千トン)	サバ缶の国内供給量(推計) (A)+(B)-(C)(千トン)	2016年と2017年の平均国内供給量が基準	家計調査年報における魚介缶詰の1世帯あたり支出金額(年間合計)	2016年と2017年の平均支出金額が基準
2016年と2017年の平均	38	9	3	44	100%	2,539円	100%
2018年	49	15	2	62	141%	2,891円	114%
2019年	45	33	2	76	173%	3,014円	119%
2020年	-	17	2	-	-	3,140円	124%
資料: 缶詰時報、財務省貿易統計、日刊缶詰情報							
注: サバ調整品のコード番号は、1604.15-000							

日本国内の小売店舗における輸入サバ缶の販売状況はどうか。図1に、「水産缶詰（マグロ・カツオ以外）の販売金額上位50品目におけるサバ缶合計に占める輸入サバ缶の比率の推移」を示しました。輸入サバ缶の品目数は、2017年1月～2018年4月までは2品目以下で推移し、2018年5月以降増加に転じ、2019年1月～2019年10月には輸入サバ缶が8～13品目に増加しました。しかし、サバ缶ブームが落ち着いたこと

により、輸入サバ缶の品目数が 2020 年 10 月以降再び 2 品目以下で推移しました。サバ缶合計品目数に占める輸入サバ缶の比率は、2017 年 12 月には 3%でしたが、その後上昇し 2019 年 5 月が 36%のピークでした。しかし、2020 年 10 月以降減少し、2020 年 11 月・12 月には 4%に低下しました。

東南アジアからの輸入サバ缶は、国産サバ缶との価格差利益を訴求した缶詰です。東南アジアで缶詰用に使用される日本産サバは、小型サイズで脂の乗りが少なく、日本国内で使用される日本産サバに比べて品質の劣るものが多い。このため、輸入サバ缶を食べた消費者から、サバ缶とはこんなものか、パサパサした味でそれほど美味しいものではないとの評価が広がり、これが作用して、サバ缶ブームの風を弱めた面があると思われます。消費者は安い価格のものを購入しても、それが不味かったら二度とサバ缶を購入しなくなる可能性が高い。このようなことから、国内の消費者は、サバ缶ブーム中には輸入サバ缶を頻繁に購入していたが、サバ缶ブームが落ち着くと、サバ缶ブーム前のレベルに輸入サバ缶の購入が低下しました。

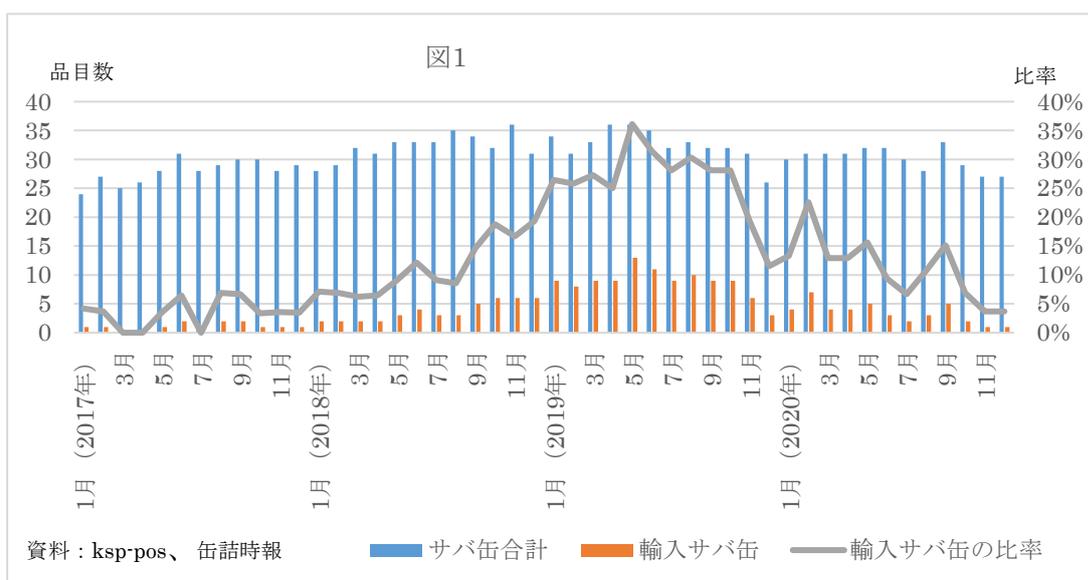


図1. 水産缶詰（マグロ・カツオ以外）の販売金額上位 50 品目におけるサバ缶合計に占める輸入サバ缶の比率の推移

次回の「サバ缶詰を食べよう」シリーズは、最終回（第 30 話）の「進化するサバ缶詰」です。長い間大変お世話になりました。最後まで宜しくお願いします。